



特集

学生×震災×遺族

1.17に学び、震災と向き合う学生

「ほっ」とな灯りプロジェクト

昨年6月に始まった「ほっ」とな灯りプロジェクト。小池宏隆さんが代表を務める、岩手県釜石市に街灯を贈るための企画だ。きっかけは、初めて訪れた被災地で聞いた「灯りが欲しい」の一言。神戸も震災を経験したこともあって、多方面からの支援を受けてスタートからわずか2カ月で1本の街灯を建立。度々東北に足を運びながら募金活動を続け、寄付額は100万円以上に達した。今年の3月11日前後に合わせて一挙に6、7本の街灯を贈るめども立っている。

震災から1年半以上経過した被災地で、何よりも必要なのは物ではなく、関心。東北を忘れない、その思いを東北の人達に届けたいと彼らは考える。「ほっ」とな灯りプロジェクトが活動を続け成果を出し続ける限り、東北が忘れられることはない。

●小池さん：出身が関西でないこともあり、震災の記憶は無い。でも被災地では神戸から来たということだけで「あ、阪神・淡路の……」という反応をされる。(活動していても)実際に被災していない点で被災地の方との認識のずれ、引っかけがあるんです。神戸大生はあまり教

阪神・淡路大震災を経験し、その体験をもとに震災災害に対して支援を行ってきたHANDS。その理事で、17で当時神戸大生だった息子の健介さん(当時11歳・経済3年)を亡くした白木利周さん。そして神戸大生ボランティアバスへの参加と並行して東北に街灯を贈るボランティアを始めた「ほっ」とな灯りプロジェクト代表の小池宏隆さんとメンバーの田中風帆さん(ともに法・1年)。17を直接経験した世代と、当時の記憶が全くない世代。まったく違うバックグラウンドを持ちながら、同様に東日本大震災の被災地でボランティアを続けている3人に対談してもらった。

震災対談

世代越え語る震災への思い



写真左から田中さん、小池さん、白木さん(2012年12月21日・HANDS事務所で撮影=小野学)

HANDS 理事 白木利周さん

「ほっ」とな灯りプロジェクト

小池宏隆さん

かざほ 田中風帆さん

(ともに法・1年)

HANDS事務所からの帰り道「ほっ」とな灯りプロジェクトの2人は生き生きとした表情で今話を話していた。悩みもあつたが、自分達の方針は間違っていない。そう話したように、若い世代は先輩の思いを受け取ったようだった。

●白木さん：「ほっ」とな灯りプロジェクトを途切れないようにしてほしい。君たちの活動は被災地を勇気づけるもの。若者には行動力がある。知識があるのは大切だが、行動しなければ何も変わらない。行動力がいかに学生がつけるか。そこを大学で学んでほしい。

●田中さん：僕らも広く浅く支援するか、狭く深く支援するかの二択で迷っていました。そのお話をすごく参考になります。

●白木さん：それに加えて第一声は「帰ってきたよ」と言っておきたい。そうやって家族同然の関係になって欲しいんです。

えられないが、これだけの被害があった大学は他にない。そんな神戸大だからこそ被災地の反応を受け入れられ方が違つたのだと思います。災害に限らず、今は色んな形で命が軽く見られている。命の大切さを心に留めて生活してほしいですね。

入学以来、被災地でボランティアをしたい思いがくすぶっていた。源流には東日本大震災当時の記憶がある。地元は仙台市。しかし発災当時、高木さんは神戸大の入試の真最中で関西にいた。最も大変な時期に地元におらず、電気も水道も通ってから帰った。「申し訳なさ、疎外感があつた」。



岩手県の陸前高田へ。仮設住宅で足湯などを行った。「神戸大じゃなければできなかったかもしれない」。阪神・淡路大震災から続くボランティア支援体制と高木さんの思いが結びついた。しかし、まだまだ「恩を返せたとは思えなかった」と打ち明ける。「東北とゆかりのない学生が向こうを愛して一所懸命ボランティアに通っている。私ももっとやらないと」。2月にもう一度被災地へ行く予定だ。【田中郁考】

学生の想い

梅本匠さん (国文・2年)



すでに過去のこと。自身も東北での活動がなければ向き合わなかった。「風化が進んでいる。東北はそうってほしくない」。被災地に対し、より多くの人に関心と気持ちの共有が必要だと考えるようになった。昨年12月に東北で行われた震災シンポジウムにはパネリストとして出席し、1人でも多くの学生の支援参加を訴えた。現地での復興活動や交流を続けられ、自然と愛着が湧いてくる。「好きになればまた訪れる。絶対に忘れない」と梅本さんは話す。気持ちの共有にはSNSを推す。「身近な人が支援を続けていると知れば関心を抱く。フェイスブックのシェアなどで全国に広げることでもできる」。東日本大震災から2年近くが経ち、メディアの報道も下火になりつつある。風化を繰り返さないために、梅本さんの活動は続く。【田中謙太郎】

神戸大東北ボランティアに参加を続ける梅本匠さん(国文・2年)は、阪神・淡路大震災に対する苦い思いを東北支援に生かそうとしている。阪神・淡路大震災では明石市の自宅が半壊する被害を受けたが当時の記憶はない。おとし、大学入学直前に東日本大震災が発生。興味本位で参加したボランティアで訪れた被災地の状況に茫然とした。「何かをせねば」との思いからその後も被災地を訪問。そして被災者との交流の中で出たのが阪神・淡路大震災の話だった。仮設住宅の使用年数などを尋ねられ、過去を学ぶ重要性を認識した。しかし周囲では阪神・淡路大震災は

阪神・淡路大震災で家族を亡くし、残された遺族。失った家族は戻らないが、悲しみにくれたままではない。大震災の記憶を絶やしたくない、犠牲者のことを忘れたくない。その思いで当時を語り継ぐ活動を続けている。そんな遺族の声を届ける。

遺族の声



救われる人から救う人に 上野政志さん

●松永さん：2005年から、人命救助

人から「頑張れよ」と励まされ、それ以来その友人とは疎遠になってしまった経験がある。友人にとっては自分を思いやる言葉だったのだろうか、当時の自分は今も十分頑張っているのに何でそんな事を言つたのかと思つてしまった。そのくらい被災者の心のケアはデリケートな問題。それでも、現地の状況を目の当たりにして自分もボランティアを経験すること。徐々に、自ずと現地の人と話せるようになってくる。一番大切なことは、そこで生活している人と信頼関係を築いていくことなのかなと思う。若い人は、やることもできること多い。ボランティアは被災者のためにやると思つてる人もいると思うが、その体験を通して自分の心も成長できるはず。

父・和巳さん 息子のもとへ 競恵美子さん

昨年7月、阪神・淡路大震災の犠牲者となった競恵美子さん(当時11歳・自然科学研究科博士前期課程・1年)の父・和巳さんが、がんが原因で世を去った。震災から18年。語り継ぐ世代の高齢化が進み、数年後には震災の年生まれの学生が神戸大に通つことになるだろう。知らない世代「は今後、どう震災と向き合うのか。基弘さんの母・恵美子さんは、今ある機会を存続させること、心に寄り添うことが大切だと話す。人を癒すロボットを作るのが目標だった基弘さん(当時11歳)の遺志を受け、神戸大では2005年から、人命救助